

畫  
道  
要  
訣

牧心翁遺稿

(公  
刊)

## 小 引

畫道要訣一卷は牧心齋狩野安信が丹青の餘暇、自ら文筆を執つて後進の爲めに、畫道の要諦を記したものと傳へて、現時狩野忠信家に傳製する。美濃版袋綴本、墨附四十七枚の一冊子、今此の一本を底本として、こゝに活字に移すことを試みた。其の説く所、たとへば『山水之格』の一章の如き、全く摩詰の山水論を其のまゝに譯解したもので、後、林守篤の畫室にも亦是れを邦譯したことは、既に周知の事實である。畫山水の要訣として、早く此の一篇が我邦畫人の間に注目されたことが知られる。是れを外にしても、『畫道心與天地可等』の一節を芥子園畫傳に負ひ、また六法を説き三病を論ずる等、彼の士先賢の畫論を祖述するものは多いが、而も一面には畫品に自然、神、妙、精、細密の五等を分ち、畫の六要に氣、韻、思、景、筆、墨を説き、なほ、心、氣、形、式、具の五諦を論ずる等、よく彼の土の畫論を味讀し、また自己の體驗に立つて、飽くまで主觀的寫實主義を高唱し、腕氣ながらも一の體系を組立てた點は、本邦畫論史上に於ける最も注意すべき文獻である。殊に此の種の畫論が曾て試みられなかつたことは尙更である。

本書一も安信の署名なく、一見直に牧心齋其の人の著録であることを證するものは無いが、書中我先祖古法眼云々と云へるより何れは狩野派畫人の遺記なることは云ふまでも無く、殊に延寶二年の禁裡營造に際して聖賢の障子を圖繪したことを録して居るのは、古畫備考所引、禁裡御造營部類の記載と一致し、所傳の如く安信の原撰として疑ふべき餘地は無いであらう。其の上伊川院の五男立信永惠に養はれて宗家第十六代を嗣いだ忠信氏の家に、安信の多數の粉本類と共に傳襲されて居ることも亦消極的に是れを證するものである。而して正木直彦氏は忠信氏が自ら筆を執つて、此の底本から傳寫せる一本を藏されて居るが、同書中の忠信氏の識語に『本文は安信六十八歳の時認置たる物云々』とある。こゝに六十八歳とあるは恐らく本卷末尾に延寶八年の記叙を有するより、貞享二年七十三歳を以て他界したことから逆算したものと思はれ、必ずしも正確を期し難いが、餘命僅に五年を有するに過ぎなかつた彼として、當らずとするも遠くは無いであらう。

公刊に際して一言したきは例に依つて出来るだけ忠實に底本に依つて活字に移し、誤字と見るべきものも其のまゝに存置して是れに（マ、）を加へ、また假名の清濁をも底本に従ふことにしたが、たゞ句讀に就いては底本の文書價值必ずしも重視すべきでないと思はれるから、讀過の便に供へて是れを適宜改めたことと、三四の送假名の脱字の、底本に朱を以て加記したものは、是れを本文中に組み入れたことである。尙本書の書名に就いては、本冊原初の題簽を缺失し、現今、忠信氏が自ら記して『畫道要訣 牧心翁遺稿』とした題簽を貼して居るが爲めに且らく是れに依ることとした。（田中）

## 畫道要訣

牧心翁遺稿

夫畫の道は伏羲畫八卦<sup>ヲ</sup>其後天地の徳に通したまひ、萬物の情にあまねし、續て黃帝の時に史皇蒼頡と云者<sup>(俗カ)</sup>もの有し、史皇ある時龍龜魚鳥の形ちを見て、則圖する事をなし、蒼頡また文字を成す。其後相續て畫圖書法共に多く成れり。畫は能く教化の道を成し、人倫を助け和らけ、神變を極め、幽微をはかり、畫書一體にして別ならず、文は能く其事を述へ、畫は能く其象を載す、爰に知る、書畫は貫道の至寶なる事を、故に凡<sup>(元カ)</sup>聖事物寓然と筆墨を下す事あるへからず。

夫畫に有<sup>レ</sup>質有<sup>レ</sup>學、質と云は生れ付て器用なる天性の質有、學と云は習學て其道を勤て其術を得たるをいゑり、畫の源を云時は、天に日月星辰のつらなり、地に山川草木の品物をあらはし、其間に人物の飛行往來いたし、雲霧風雨のましはる、みな是天地自然の畫にして、文章有、ゑやうあり、是を眞の妙と云神と云へし。

凡<sup>レ</sup>質畫は不<sup>レ</sup>如<sup>二</sup>學畫<sup>一</sup>といへり、我家に云傳は、天質の器用を以て書出すの妙は妙なりと云へり、さはいへと是を貴はず、いかむとなれば後世の法と成かたし、學<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>至るはくるしみて傳ふれとも、萬代不易の道備て、子孫是を受けて失はず、書傳へ云傳へて後世に其道を残す、是によつて畫は法を始めとして、妙極を次とす、しかれ共古今の事宜、古人の法を盡さされは、其道の感應有にきき故に、畫について議論を極め、古の上工の道を考ふる事を終とする也。

### 得氣韻之神氣

凡<sup>レ</sup>眞畫といへるは、第一に神と云事を能守り得て、萬物一なる事を悟り、心性の眼を筆の先に徹するを專要とすへし。如此をさと極めざる時は、死畫と

云ひて眞の畫にあらず、此玄旨を通達せざる時は、何の思慮もなく唯に墨を塗り付たる様にのみ見えて汚らはしく、全く筆の靈氣を失なふ、眞畫を得たるものは筆を一劃引くとひとしく、生氣をあらはして、其形はたらきたましむ備る。是則よく神思をめぐらし筆を揮ふ故、意に畫といふ思ひを離るゝ也。全く畫に心をしはられずして自然と畫をあらはす、然る時は手の内に滞りなく、心氣凝かたまる氣味なし、唯始めより我を先にして、至極に到らむとおもふはすなはちいたらざるなり、至る事をしりものとめすして、則いたると云事を能々辨ふへし、是神也。

### 畫道ハ心ヲ與天地可等

平生繪書むとなさは必天地と心を合すへし、何以天地と云るなれば、譬は一尺二尺の紙絹の上、又は屏風の類、其上段を天之位になし、下段を地の位に定めて、其中間に心を立て、其繪様、其圖の景を定む。世間の初學の者の畫をなすをみるに、筆を執るといふや、何の心もなく偶然と率爾に心を立て、七情の氣に觸<sup>(マ)</sup>まかせ一幅半幅の上に無分別に書なす、誠に心あるものゝ上より是を見る時は、自然に見苦かるへし、か様に心得態<sup>(カ)</sup>をなす時は、年を歴るとも終に奇妙を得かたかるへし、すへて是を以て其繪様の大略<sup>(マ)</sup>の嗜好を知ると云成へし。

### 陰陽不假私之彩色

天地開け陰陽分ち、五行合して萬物の像を成し、四時の風化言事なく、時を違へすしてひとりめぐり移り、草木榮へ治まり、もとより朱丹碌<sup>(ク)</sup>青をからすして、自然と花は紅に葉は青し、白粉をかり用ひすして、白雲白雪の白きをなし、山林青碌<sup>(マ)</sup>の彩を施すといへとも自然に翠に、蒼天の青き猶以同し、鳳凰自然と五色の性を得たる、皆以何そ人物の丹青を借り用るや、是自然<sup>(マ)</sup>天<sup>(マ)</sup>年の色也、然る時は全く墨の一物を以て、五色自然と兼具る様に書あらはす、是を心を得たる妙道と云成へし、始より五彩に意をあらしむるは、自然の妙にあらず、然る

のみならず萬物皆をむく成へし、譬は墨梅墨松を書いて心に自然の色をふくむ時は、見る者をして其梅の白き、松の青きに至らしむる、是妙品の至り成へき歟。皆人もろゝの藝能を學ふに、根本の師匠に相對する事なき故に、物々に障隔られて懈怠するもの也、其根本の名師とは何ぞなれば、則おのれか一心也。此本心の名師によく尋あふて、其道を習ひ熟得する時は、必上品の格にいたるべきもの也。

### 畫ノ中道

墨を摺筆を執る時全く心を清まし、慮を閑に正敷して、性神を筆の先に通し、物に亂れず、雜らずして畫を成すへし、扱圓勁とまろくきひしく、快利と心能くもとより偏ならず、傍よらざる様にして畫すへし。甚た筆をすみやかにはやくなすへからず、然る時は筆の勢力を失なふ。しかりとて甚ゆるやか成へからず、ゆる過る時は筆とこをつて濁るなり、又甚筆を肥やすへからず、筆法肥へ過るときは俗おほく愚癡に見ゆる物也、さりとして甚た瘦すへからず、やせ過る時は枯かはひてよはきもの也、畢竟其事物によりて准的とてまとかねの格有順逆の二つを能案し工夫すへきものなり。

### 離智惠形之外ニ遊テ業ヲ成ス

夫畫をなすに方圓の形の内に住する事を全く忌み嫌ふなり、又前にいへる如く畫の生氣を後にして、色とる所の丹青の細蜜を一一先に俱足せん事を肝要とす、是又しかるへからず。およそ至極の妙理にいたらねとも則神に至り、其神にいたらねとも妙に至り、其妙に至らねとも精にいたり、其精までに至らね共謹て細蜜を用ひて見にくき事をなさず、自然なる物を上品の上とす、神は上品の中とす、妙は上品の下とす、精は中品の上とす、細蜜にまていたるを中品の中とす、是を五等と云なり、是は上品上工のうゑにて品を定め段をわかちいふ物なり、大様是まてにいたるもの尤稀なり。書に曰、すへて上代諸の畫を観る

に、唯顧愷子<sup>(イ)</sup>が畫其妙理得たりと云へり。顧生平生人に對して終日倦みくたひるゝ事あたはず、神氣をとゞめ念想悠々として、自然の理を悟り得て、物と我と二つともに忘れ離れ、形を離て其外にあそび、知恵を捨て去て自然と槁木の形のことく、身を死灰のことくならしむると云ひ傳へたり、是を以則妙理に至るものと云へきなり。

### 畫格法

畫に能格、妙格、神格とて大法三の格有、能と云は字注にも工也善也とて、凡畫をなすにかならず其物々に性有、たとへば松は松、竹は竹、山の高き、水のなかれ、鳥は鳥、人物屋臺にいたるまで萬物の形を寫す、其形の外に性と云物をふくむ、性と云は則物々の本性也、其本性をよく備へ、筆の六法ともにみたれす、よく自己に書得たるを能格と云、あるひは上品とも可云なり。

妙格とは、右いへる如く能格に能く叶ひ、禽獸草木萬物を書なすに、自然と眞像をあらはし、見るものをして信を發さしむる、たとへば吳道子か龍を繪書しに、ひれをはたゞき、雲をおこし、雨を降らす、いか成故有て龍の働くと云事を却て筆者もしらす、是妙の所也。莊子にいへる斤を以、鼻の先の白土を削りとるに、其白土はかりけつりて鼻つゝかなし、けつらるゝ人もましろきもせず、けつる人も土はかりけつると書し、皆是妙也、此妙に至つては、師もなく、弟子もなく、人もしらす、其道の功をもつて、自然とあらはるゝ物也。神と云は、高いかな此道、物々の象に應して其物をあらはす、神と云は靈なり、世の人は人に神ある事を知りて、物に神ある事を知らず、神は萬物を引出すもの也と字注にも有、しからは天地同體森羅萬像、畫も筆も、天地同根萬物一にして隔なし、此位にかなふを神と名付るなり、たとへば鶴を繪書むには筆か鶴に成歟、鶴筆に成歟、筆者も知らず、鶴もしらす、筆と鶴と自然と一體に成て其圖あらはるゝ、莊子曰以「天合」天是神也。



## 畫之六法

晉謝赫曰、すへて畫六法有、一曰氣韻生動、二曰骨法用事、三曰應物象形、四曰隨類賦彩、五曰經營位置、六曰傳模移寫、是を六法と云、氣韻生動とは、筆を下すとひとしく活々として靈氣を備へ、山水鳥獸草木に至るまで、其物々に本性を備へ、活法を要として靈氣をなし、死法ならざるを云。骨法用事、筆よはみなく、縱横ともに筋力をあらせて、ほねのあるを云。應物象形は其圖其物の象をみて、其正本に應し、そむき違ふ事なく、よくかたとり書を云。隨類賦彩、彩色の法を云、事物に自然と一いろ二色、或は五色ともに備り得たる天然のいろ有、其類にしたかふて、誤なく彩色を施すを云。經營位置、畫に應して上中下の位を定むるなり、一尺半幅の上にも、取合の位を專要にすへきを云。傳模移寫、畫を移し寫す事を云、或は古の上工の能き圖をみて、其古法の地取筆法にしたかふて、我なす所にうつしさとるを云。右是を六法と云、古より畫人悉く兼備る事稀也。凡畫は能く其像の似たるを移して、骨氣とて其形にたましゐの有をよしとす。形を先にせず、能く似する外に畫を求る、是妙を得たるなり、後世の畫は大略形を似せ得たれとも、氣韻全く生ぜず、筆法我意をなして、そむきみたれ格にたかふ、是ひとへに畫にあらけ、是第一とすへき所の道なり。

## 畫之六要

古曰畫に六要有と、一曰氣、二曰韻、三曰思、四曰景、五筆、六墨、氣は其形に性氣なく、靈氣を失なふ事有、是形に心をとらるゝ故也、それにまよふ事なきを氣と云、韻は其圖象によつて、かくれたる所、あらはれたる所、筆を及ぼさずして心氣の通するを云、思は思慮をめぐらして、へんくつならす、物のよろしきに隨て、時に應し作意をなすを云、景は四季折々の景氣みたれたかふ事なく、山水遠近の法にそむかず、景を定むるを云、筆とはたとへは其圖其形の正きに隨ふて、畫をなすに、心のくはり愚癡ならず、卑しからず、美し過す、

譬は羽あるものは人の心をして飛か如く、足あるものは自然と動く様に勢ひあるを云、墨とは或は遠近、或は高下、薄き所、濃き所のくま皆墨によつてあやをなし、清濁をわかち成すをいふなり。此六要を得るものは、神の神なるもの也、若悉く六要備らずとも、一法にも長したるは下手の名をとる事あるへからず。凡眞の畫道を得たるものは、求めて世に名譽を取らむとせずといへ共、一心に實をこめて其道を守り勤る時は名聞自然に發し、世にあらはるゝもの也、若、時の仕合を以て美名を取ると云共、もと不實より出たるほまれなれば、頓て名を失ひ安かるへし。

### 用筆墨格法氣韻之病ヲ論ス

夫畫を用ゆるは尤第一筆墨なり、次に心運と云て、心のくはり働きを肝要とす、其圖の無き以前に、程と位を心中によくうかめて、品々の景物、萬の形をなすへし、物々皆道理に適ふ事を一心にこめて、筆を下すへし、墨色に意をうははるゝ事甚だ多くして、其墨色のつやに心氣を取られて、筆を全くわするゝ時は、眞の體を失ふて筆法空敷成なり、又筆の強きにのみうははれ、墨を忘るゝ時は、色つや失て、意氣つたなく弱きものなり、如此過たるも及はざるものもに病也。すへて格式にしたかふて、自然の色の道理にもとづく時に、氣韻生動全く備らんのみ、此心を得たるは上品たるへし、少もかけ失ふ時ははや病也、凡其物其景氣によりて、成ほど軽く書なして能き有、又巧密と云て、細に念を入委き有、するとかくさかなる有、如此を能辨せず片おちにへんなる時は又筆の病也、畫道の病の内俗病尤大也、古筆の妙を學ふと云て、筆の輕きを本とする時は、はやく筆かれかはひてすかるゝ也、又細筆のめんみつなる法を學ふとて、未熟の時に似せぬる時は、それにしはられて惡敷、おのつからきこつ也、未至らずして走筆を偽り似すれば、もと自然の理にあらざる故、頓て手さきかなはす、本を捨て末を學ぶ故、格法を失ふ、是第一の病なり、古より筆に三病有と云り、一版二刻三結、版と云は、第一手先弱く、筆愚癡に、體用かけ、物の形

偏にして、圓滿なる事あたはず、すへて理屈にみゆるを版と云、刻とは、たとへば、板に物をきさみ付ぬること、繪圖をなす如く、筆の勢ひなきを刻と云、結とは、眞直に筆をつかはんすれ共、却て延る事あらず、清からむとすれとも却て濁り、散せんとすれとも滞り、のひ／＼とする事なく、行つかへたる様成を結と云、是第一の病なり、其外確病などいへる有、確はかたしとよむ字なり、筆先細密過て、始より終にいたるまで、筆をいつくまでも行とゝかする様に、かたく勢ひを失ひ、心通する事なく、筆墨共に能く物象を似せ移すといへとも、死物に同じく、彫形を見る如く成を確と云、是右の六法を一つも悟り得ざる成へし、能く此心を得むとならば、根本慥成實のしこみを專一とすへし、是則實道なり、能く此實を守り得る時は、萬法に移り安し、實たらすむは筆を捨へきなり、實なくして華にのみ心を入れるは、當分はしかるへくみゆれとも、次第に筆枯木の如く、上をかさりたる様になる也、萬事實を根本とし花を枝葉とすべし、何そ本みたれて末成就する事あらむや、しからは其體を忘れ其用を取る事もよりあるへからず、昔より多くは華媚を好みて、打みるより美敷書なさんとする故神氣を失なふ、眞に俗病の甚しきものなり、故に上品の畫にかなふ者世に稀也。

### 活 寫

鳥獸草木にいたるまで活寫と云事有り、其鳥其草を側に置いて似せうつす、然るに大方の功を得たる人の圖せるは、其形跡彩色一として不似と云事なく、何れを正と分ちかたきものなり、然れ共其正の事物にかたち色をうははれ、心を移して靈なく、自然と勢ひを失なふて死灰の如く也、上品の人の寫し得たるは、其くま／＼にいたるまで、委細に心を付しきりに色つやを似せすといへとも、肝要たるへき生動自然とあらはれ發して、活氣おのつから通達し、備りてみゆるものなり、しかれば能似たる内にも、却てよく似ざる事有、似ざるうさにも自然と正と寫と、一致なる事あるへし、畢竟筆墨を仕ひ下すに却て筆墨のため

に使はれて煩をなす、筆と墨とは人の淺近の事といへり、是を我物となす事を得ずむは、何ぞ妙にいたる事を得んや。

### 心 氣 形 式 具

畫をなす者は、第一心氣形式具の五をもつて、みつからの勒とする也、心と云は身を修むるものは心を明にすと云事有、業をなし繪をなさむんと思ふものは心を平にすと云事あり、心を平にすとは心のかたよる所なく、其物に對して、取つかす心を平になすに有、心平ならされは、筆にむら／＼といたして、覺えざるに滞り出来るよしなり、畫書ものも業をなす者も、心をおさめ心をみかきて、明にいたさん事はまことのつとめなれ共、心を常にみかき明にいたす事は、又其道かはりて、晝夜にねり、朝暮に心を付されは其事成かたし、いはむや一藝一能をいたすものも、それを心さすと云とも、たやすく叶ふ事にあらず、然るを惡敷導引を受けて、心得にたかふ所出来る時は、必我心にかたよりたる所出来て、却て業のさまたけと成る事多し、此故に只平心とはかり、古より云傳たるに深き心得は有ぬへし。

氣と云は、平生物にさはき、驚き、怒り、つかれ、飢、くたひるゝ類ひを云、氣の事、古より氣を養ひ氣を修るなと云事有、此業の上には先常に氣を隠すと云事有、氣をかくすと云は、毎度氣を安閑にして、内にぬけからにせず、實を守るを專となす事也、上工は常に氣を新たにする事有、氣あらたなれば、おのつから筆も新たなり。

形と云は心氣の入れものなれば、心氣はまつたく形を離れず、此故に此業を成さむとする時は、先我形をたゞしくいたすへし、形にかたよる所、ひづむ所あれば、手の運び正しからず、此故に形を中に、すへて頭より手足まで、自由運動する如く、座席を直に成して其業にむかふへし。

式とは筆の運び様、筆の持様、墨筆の善惡、帋硯の式、すへて畫書くに付て、古より格式の定まりある事也、家々に傳へ來れり、是を覺えて其格式の違ひな

きことくいたすを式と云也。

具と云は畫に入所の諸具なり、是に品々の具有、皆不足しては全く叶ひかたし、彼れをかりて是を補ふ事有といへ共、是にはかり用ひていたす事は實にあらざる也。

右此五を、畫のたくみ成道の本と云へり、さて既に術盡き其業の神妙を得たらは、此五の事さらに用るにたらず、莊子には宋の元君と云王、常に畫圖を好みたまふ、此故に大勢の畫工を召さるゝ、皆昇殿してたかひにしきだひし、或は硯を引よせ、筆をねふり、或は墨を點して、心を畫圖にのみよせて、道を外にするも半也、又一人の畫工あり、おくれていたれり、垣として獨其家に歸る、跡より人をして此人をみせしむ、此人衣をぬき、足を伸へ、あかはたかにして居れり、元君のいはく、可也、是眞の畫工也、又曰列御寇伯昏無人か前にして弓射る、水を盞に入、我肘の上に置いて矢を放つ、二の矢先の矢にかさなる、其はやき事妙也、此時御寇が形動かざる事、木像の如し、無人かいはく、是は射の射也、不射の射にあらず、爰に汝と高き山に登り、あやうき巖石を踏み、百仞の淵に望まむに弓射る事を得むや、こゝに於て無人則高山に登り、あやうき石を踏み、百仞の淵に望む、うしろは巖きに足をなかは踏み出して、御寇を進め、弓射む事をこふ、御寇此時に於て、地にふし、汗を流し、すすみ得ず、無人か云く、それ至人は上青天を窺ひ、下黄泉に至り、八方覆ひきされとも、魂變せず、今汝恐れ謹て目を動かすの心さし有、汝矢を中むにおゐては、誠にあやうしと云へり、是皆術盡ての業なるへし。

### 佛像可畫格

佛ハ梵語也、覺と翻譯す、覺はさとるとよむなり、眞妄の性相を悟り、三世の因果を悟り、十界の優劣を悟り、凡の事いまだきさる以前に、あらかしめきさす所を悟りて禍を請す、三毒にやふられず、五欲に穢かされず、寂然不動覺體清淨圓滿にして、萬法悉く通し俱り、心廣大にして、猶虚空の如く成るを

名付て佛とす、されは是を圖せは、何れの佛像を畫すとも、先觀念すへき事有、佛は離れ難き名利色を離れ、修し難き戒定慧の學を修して、清淨法身の高德を俱へたまふ事を信して、身を清め心をおさめて、佛の徳を我心に移して、畫書時は佛すなはち我れ、我即佛也、如此觀念して、畫書は畫圖の妙すなはち筆端にあらはれむ事、猶豫すへからず。

### 道人可圖格

老子の學は虛無自然を以、本とす、虛無と云は道なり、道は無名にして、混沌未分の先に有、故に道德經に無名は天地の始と云へり、無名即虛無なり、虛無にして然も四時をたかへず、萬物を出生す、是を自然と云也、自然とは天造にして人作にあらず、自然の二字はよつてしかりとよむ也、老子は無名を以本とす、故に有心にしてよるにあらず、有心にしてしかりとするにあらず、よるへき理にはより、然りとする事をは然りとす、人の自性にも寂然不動安泰無事にして然も當然の理に應ずるを虛無自然と云也、されは此像を圖せは、虛無自然を感じて、是非得失を忘却せは、畫圖も又美をつくし、善をつくさんのみ。

### 聖像可圖格

儒道は天道と一理と教る也、天に有ては命と云、人に有ては性と云、皆理也。天の五行、人の五常、みな天地を表して行ふ道成る故、天即我、我即天也。第一に五倫の道を正に守りて、三綱領八條目の心法を肝要として、一心の主宰に敬の一字を守るを本とする也、故に聖像を畫書むとなさは、致知格物の理を得道し、中庸の道を一心にこめて、生知安行の姿をあらはし、溫良恭儉讓の字義を悟りて筆を下すへし。溫は面色うるはしく、溫和慈愛の事也、良は正直にして、少も私曲なきを云、恭は行義の起居うやうやしく、禮をなして殷懃なるを云、儉は萬事の法を守りてつまやかなるを云、讓はへりくたりにて、ゆつる事也、物事我を立てず、謙退の氣味也、此道を能々心に通達して書なす時は、自

然と一貫の道、忠恕の容あらはるべきなり。

## 山水之格

山水を繪書には、第一心のくはり働き肝要なるへし、些なる帋の内に大山江河をちゝめ、或は一尺の樹木、一寸の馬、二分三分の人、遠人に目なく、遠き樹木に枝なく、遠き山には谷合なく、遠き水には波なかるへし、高山は雲もひとつに書なす、是先大格なり、山の腰は雲塞き、覆ひ、石壁岸には清水なかれ、泉ふさき、高き樓臺には樹木にてふさき、山路を見せむとは人をあらはし、山の峯するどく峻嶒なるを峯と云、平かに高きを嶺と云、切立たる様に峨しきを崖と云、山の間に水のある所を澗と云、其水の流るゝを溪と云、泉の湧出るを谷と云、此品々を一一に書つくさんとせは大格みたれ悪しかるへし、すべて山の遠近を能分つへし、遠き山近き山、ひとつに見する時は、必景氣を失なふ、山の腰のめくれる所には寺あるへし、岸の行つまりたる所には土橋の類あるへし、路ある所には人行き、路なき所には林ふさき、廣き流れには帆の有船、林しけき棹には店舍酒旗をまじへ、岸に望む古木には根をあらはし、藤かつらまとひ、水につく岩には底穿ちて水(盡力)□き流れ、遠樹には枝あらはに、近き樹には枝くわしく、およそ葉の有木には枝しなへて、やはらかに、葉のなき木には枝するどく堅く、土に生ずる木は眞すくに長く、石岩に生ずる木は曲りくねり、すねてすなほならず、古木は節多く半は枝枯たる體なるへし、風雨なる時は東西を辨へず、道往く人笠をおほひ、漁人簑を着、風吹て雨なき時は樹木の枝を見せ、雨有て風なければ枝葉をたれくたす、雨晴るゝ時は四方の山に雲おさまりて天の色も一しほ青み、山色みとり、水邊に網をほして入日にさらし、曉の景は四方の山ほのゝと見え渡り、雲煙横たはり、山の端に月残り、心氣晴清としていさきよく、暮の景氣は夕陽山際に影移り、汀に船共帆をおろし、道往人足を急ぎ、家々柴の扉を立よする體、すへて山の形は同じ如くに重なる事なく、樹木は枝葉の高き事同じからざる様にすへし、山は樹を以衣と成し、樹

は山をかりて骨と成る、能々此心を悟りとゝめは玄微にいたるべきものなり。

## 山水四時之景

四〇

山水の内宜敷用る所は舟なり、もとより淺き水にうかむ舟なれば、重き船の體書へからず、渡海の大船のとき大様用へからず、第一四時の體、其時の景物を別ち書へし、春の景は陽氣立歸る折なれば、人物欣々とするこはしく、四方を詠めて心氣のひくゝと和らかに、山々の眺望漸々ゆるやかに、雲霞共に横たはり、里々煙わたり、梢の色紫たちたる様に見え、村家の垣根より一重の白梅梢をあらはし枝を交へ、柳の枝末も翠たち、山吹岸に咲初て、風も漸々あたたかにおとつれ、いつしか人々庵を出て山野に遊び、萌出る草々所々青み渡り、淺き池水水残らず解わたり、谷陰に消殘る雪間をわけて、農夫鋤鍬をかたけて野邊に畠うち、畔に耕し、やゝ春ふかく成行けは、遠山の花笑ふか如く、嵐より音信て片枝散行花流水に隨ふて、あやをなし、たゞの草共も春雨に濡ほされてはひこり、末の春に成まゝ、歸鴈つらなり亂れ飛て峯を越行體の類成へし。夏の景は人物盛に山林陰々と茂り、新樹葉を覆ひ、田夫耕作のいとまなく、笈の流れ入江をみなきらし、五月雨の頃は打つゝひて空も晴やらす、軒近く雲打おほひ、水邊流まして水草浮草青みわたり、往人歩行涉りし、空晴るゝとひとしく日影身を照らし、旅人暑氣にたへかねて少の陰に休息し、細き流れに(マ)喝を凌ぎ、水邊に樓閣をかまへ、納涼の地を求め、炎天の夕は綿を束ねたることき雲夕陽に覆ひ、高き峯の如く、少の雲の内俄に雷鳴渡り、急雨頻りに(マ)うつして、暫時の間に雲晴れ、跡散して、光陰にわたづみに移り、風涼しく人々端居を成して、晝の暑氣をいこふ體成へし。秋は人の心をして、蕭々とすさましく、朝た夕への風冷やかに、うら吹音に一葉を落し、或は殘暑夏よりもあつく、秋(マ)陽晒の如しと云る如く、秋の夕はかたふく日影ひかり一しほてりて甚敷物也、野路の草種露はみ、花みたれて、名もしれぬ草花色を雜へ、種々の虫の音むらかり啼て、中秋の頃は暴風俄に吹おろし、も(マ)とあらの秋葉色かはりて、心氣お

のつから物冷しく、深山の方よりはやく紅葉をなし、すへて紅葉には濃き所、薄き所、さまざまに色かはりて、錦をはれる如く成有、片枝はいまた青葉残りて、あかきに雜へ移り、遠き詠め一様ならず、是猶心をとむる第一也、里にあさる小鳥群り飛び、川田の色もみたれあふて、早田漸々刈ほし、山路に樵歌牧笛の友を招き、騷人高樓に登りて、萬里の月を愛し、白雲峯をまといて、夜明なんとする時節、朝霧禁に立こみ、夕陽山の端にはやく入安く、すへて秋は夕間暮の景氣物淋しく、自然と心細く悲しき躰成なるへし。冬はおのつから寂寞とさひしく成行て、山林骨の如く、木枯の風に落葉して山も眠るか如く、時雨の雨禁にしたかふてめくり、しはしかうちに晴れ曇り、霜に枯行薦かつらのみ松に残りて、岩根行水も細く瀧の音も絶々に、水鳥羽をならへて、眠りかちに、氷の間をあさり、寒鴉とぐらを忘れてむらかりとび、遠寺の鐘も霜にさへて響き、漸々雪降積りて、山林人家同じ白妙に見え渡り、枯木の枝たはむはかりにうちなひき、里々多くは扉を閉て爐をまとい、往人笠をかたふけ、簑をまとい、凡雪の景氣は種々あるへきもの也、先打見ると山の景氣里の軒端道往人まで、雪中には常より遠く見ゆるもの也、如此を能々辨へ工夫して寫すへし、今爰に各々其大概をあけて書つくす也、是等を格法として、時節に隨ひ宜敷に應して、景物を製し定むへし、悉く備らすと云事あるへからず。

王宰と云し者障子に山水を畫するを見て、景意と云者の曰、江に望む古木松柏には必ず藤かつら纏ひ、上は空もひとつにまたかり、下は水波につく、千萬の枝葉雜りて曲り屈り、片枝は枯れ、片枝は榮へ、或ははひこり、或は直に、或はそはたち、四方にわかたつ、珍敷所目に辨へかたう、風物四時の景氣一座のうちにこめて、つくせり。かくの如く、形の外に心をくはり、なき所に景の象をあらはすは妙の上品たるへきとなり。凡畫法は書法に同じ、骨體を得るを肝要とすと云て、畫法にも筋骨を第一とする也。唐太宗皇帝曰、行々春の蚓のまとへるか如く、字々秋の蛇の形をわがぬることく、其内にほねの無きを惡むと

のたまへり、初學の間よろしく筋骨を先とすへし、筋骨たゝすんは肉いつれの所に歟付かむといへり、是字を學ぶ教なり、畫法尤同じかるへし。續書譜に云、大低筆をくたすに悉く古法にのみかゝはる時は、神氣うすくなる也、およそ些なる一點の墨、粟粒ほどの内にも、はや筆の位そなはる也、其内にむかふ所、背く所、あふのく所、ふす所のいきほひ有、下をあけて、上をましゑ、うくる所のこゝろをすてず、是乃ち古人の玄機陰陽相和する正理なり。

書史會要曰、王羲之字は逸少、書法に委し。生れて七歳の時より書を能す。十二歳の時に前代の筆説を父の枕の中に於て見て讀む、父大に喜ひて其書をあたふ、一ヶ月ならすして筆勢大にすゝむ。初め衛夫人の書を學ひて、みづから能其業をきはめたりと思ひ、江のほとり山の邊に遊び、水のなかれをみて、初めて歎いてはいく、衛夫人の書を學ふはいたつらに年月を費やすと思へり、果して筆墨の學既に妙所に入り、三十三にして蘭亭の序を書し、三十七にして黃庭經を寫す、空中に聲有て卿か書吾を感せしむ、我は是天台之文星なりと、又曰王羲之書は龍、天門に跳り、虎、鳳闕に臥すか如し、諫言の書、治世の文を書する時は、其文字の勢正直にして忠臣の姿をあらはし、愁傷の文、碑の銘を書する時は、其容憔悴とおとろへ孝子の象あり、逍遙の篇、孤鴈の賦を書する時は、さなから其趣きたけ高く、心氣ゆるやかに樂み、質朴之象あらはるゝなり、畫像の神佛の讀を書する時は、其姿靈驗にして清淨莊嚴之象顯然と兼備ると云へり、是皆神氣の妙體をあらはす成へし、然る時は畫法にも此心を專要として、其玄微にいたる事をもとむへきなり。

### 吳道子龍

吳道子明皇の内殿に五つの龍を畫す、其後天氣雨降らむとする時は、其龍のひれうろくす、動き働らきて煙黑雲を生ず、是は吳道子常に畫道に信ふかくして、金剛經を讀誦してよくたもちける故、見性の本心を悟り得たる故也となり。



## 燕仲穆山水

昔燕仲穆と云者、山水を繪書けるに、或人讚をして云、古へ明皇嘉陵と云所の山水の景氣を見たく思しめし、其時の名畫吳道玄と云者に命ぜられて圖せられけるに、吳子則其嘉陵に行て地景のあらましの圖をもとめ、大かたを察して繪書ける其景氣、山水不殘自然と智のうちにうかみ出ける故則畫す。かるか故其妙を得たるものは、其圖を一一に見といへとも、大略を聞得て自然と胸中にあらはるゝものなり、是則天理自然に適ふと云物ならむ歟、たとへは李廣と云者親の仇のために、虎を射殺さむとて山中を走りめぐりけるに、虎に似たる大石有、李廣心中に是を虎よと見誤まつて箭を放つ、あやまたす筈きはまで射込けると也。是ももとより石と見たら其矢立事あたはず、虎とおもひ入けるゆへかくの如し、是則性神定まるなり。性神定まる時は、一度其事をなして其妙を得るもの也、是をおのれか能とすへし。此仲穆の畫を得たるも吳道玄と同じ事也と褒美して、たとへをあけて書り、誠に至極の理なり。

陳用之小窰村<sup>フ</sup>と云所に居して平生山水を書けり、同じ時の名畫士宗復古と云者、其畫をみて譽て曰、是則活筆と云物也、活筆とは、譬へは一つの張臺の上に絹帛を張て、座のほとりにかたよせ、朝暮に是を工夫し、觀念して、繪書むと思ふ景氣形像を、心上に自然とうかみ出すへし、一心を白帟の上に通達すれば、天然と山水目にうかみ見ゆるもの也、則高き所は山と成、くたれる所は水と成、くほめる所は谷と成、明らかに見ゆる所を近き景となし、暗き所を遠き景と成し、其間に神氣にのつとつて、意を忙然<sup>マヤ</sup>と其氣にとられて、人倫の往來、草木の動き、鳥獸の飛働らき、同前に隨ふて筆を下す、然る時は其畫自然<sup>マヤ</sup>天年の景氣に移る故神妙顯れ、全く人爲の私に出來たる形に非ず、是を則活筆と云と也。陳用之是を聞て彌感得し悟りて、格法益さかんに進しといへり。

宋の顧駿之常に別所に高樓を構へて繪所と定め、平生其樓に登て梯を引て心神を靜に成して、衆人を一人も近付けず、時景を詠めて能々本心に復りて後、筆刷毛<sup>ハシ</sup>を取り畫を成す、若天地震動し、風雨はけしき時は筆を取らずといへり。今の畫人は、塵埃の穢らはしき内に本心を濁して畫をなす、豈是を畫道といはんや。古より名畫子といはるゝ者、大様俗性拙なからず、よのつねの人品に非ず、誠に恥ぢ恐るべき事也。

宇治拾遺に云、昔繪佛師良秀と云有けり、家の隣より火出來て、風おしおほひて責めければ、逃出て大路へ走りけり、人の書かする繪も多くおはしけり、又きぬ妻子などもさなから内に有けり、それにもかまはず、唯逃出たるをことにして、向ひのつらにたてりみれば、既に我家に火移りて、煙ほのほくゆりけるまで、大かたむかひに立て詠めければ、淺ましき事とて人共來たりとふらひけれど、さはかす、いかにと人いひければ、向に立て家の焼るを見て、打うなつきて時々笑ひけり、あはれしつる生得かな、年頃はわるく書ける物かなと云、時にとふらひに來たれる者共、こはいかにかくては立給へるそ、淺ましき事かな、物のつき給へるかといひければ、何でう物のつくへきそ、年來不動尊の火焰をあしく書ける也、今みればかうこそもへけると、心得つる也、是こそせうとくよ、此道を立て世に有らむには、佛たに能書き奉らは、百千の家も出來なむ、其方達こそ、させる能もおはせねは、物をも惜みたまへと云て、あさ笑ひてこそ立りけれ、其後にや良秀かよちり不動とて今に人々めてあへりける。

昔大内馬形の障子を、金岡に書せられたりけるに、其夜馬はなれて萩の戸の萩を喰ければ、勅定有て其馬をつなきたる體を書直されける時、離れす成にけりと申傳へ侍る也。

仁和寺御室と云は、寛平法皇の御在所也、其御所に、金岡筆を振ひて繪書け

る中に、殊に勝たる馬形なん侍り、其馬夜な／＼放れて、近邊の田を喰ひけり、何者のするとしれるものなくて過侍りける程に、件の馬の足に土付て、ぬれ／＼と有事たび／＼に及ひける時、人々怪しみて、此馬のしわざにやとて、壁に書たるに馬の目をほりくじりてけり、それより眼なく成て、田を喰ふ事とまりにけると也。

我先祖古法眼馬を繪書て、清水の觀世音へ掛奉りけるに、此馬夜な／＼走り出て、近き里の田畠を荒らしけると也、それゆへ人々難儀に及ひて、嫡男松榮法眼の時、継馬にしてければ、それより馬な／＼出る事あたはず、其時より京童語り傳へて、其繪馬いまに是あり。

同鞍馬寺より僧正坊の繪馬古法眼へ頼みに來たれり、されとも終に僧正の像を覺さる故、もたしける所に、或夜の夢に、僧正の形槩に顯れ見えたまふ也、夢覺て則僧正の形書寫しけり、然れ共夢中成故、其かたち分明ならざる處に、前なる杉の木に大なる蜘蛛出來て、巢にて僧正の形を張り見せけるにそ思ふまゝに書寫し、出來の後鞍馬へつかはしけるに、はゞ廣き物にて、京の小路せはく通りかねけるに、俄に辻風吹來て、繪馬事故なく鞍馬へ持行けると也、其繪馬いまに鞍馬の本堂に是あり、彼蜘蛛も繪馬のうちに書載せて今に残り有ける也。

南殿之賢聖之障子は、寛平之御時、始められける也、其名臣と云は、馬周

房玄齡 杜如晦 魏徵自東一 諸葛亮 遽伯玉 張良 弟五倫同二 管仲 鄧

禹 子產 蕭河同三 伊尹 傅說 大公望 仲山甫同四 李勣 虞世南 杜預

張華自西四 羊祐 楊雄 陳寔 班固同三 桓榮 鄭玄 蘇武 倪寬同二

董仲舒 文翁 賈誼 叔孫通自西一 等なり、此人々の影を書れけり、彼麒麟閣の功臣を圖せられたる跡を追はれけるにや、始は色帛形に銘を書れたりけり、されは道風朝臣の申文にも、七度けがせる由載せたり、其後代々の御障子、我

先祖商傳より書傳へ來たれる也、今の内裏、延寶二寅の年中造營の時仰を承りて、愚、畫圖し奉る也、色帛形は持明院殿筆せられ畢ぬ。

延寶八年申四月十日 大相國嚴有院殿尊公二の御丸におゐて、酒井雅樂頭忠清御成催さしめ給ふ時、御座中の飴り、大和唐土の銘物盡し、珍器あけてかそふへからず、御座之間御床の三幅一對、中壽老人、左右羈龜、松竹、あらたに愚是を畫し奉る。同十八日稻葉美濃守正則同所に於て御茶獻上、是又器材善美をつくし給ふ、御床の三幅一對、中蓬萊、左右七福人、畫圖し奉る、其後相續て、同廿七日大久保加賀守忠朝御茶獻せられけるにも、御床の三幅對又承て圖し奉る、中東方朔、西王母、左右羈龜、松竹也。